

蜜源植物特集

蜜源植物特集にあたって 松香 光夫

ミツバチ科学1巻から、13巻にいたるまで連載された蜜源植物45種をまとめた特集号を発刊することにした。振り返ってみると、ミツバチ科学研究所が開設されたのは玉川学園創立50周年(1979年)を記念してのことであった。その時までには積み上げた実績を評価していただいたのである。大学の機能として研究と教育が両輪となっているところから、研究所の活動の一環として、教育・啓蒙のために役立つべく「ミツバチ科学」誌を発刊することになった。以来、休むことなく続けられたのは、自分たちでも夢のような感じがするが、年4回、記事集めから慣れない編集までの、色々の苦勞が懐かしく思い出される。

私たちもそうだが、ミツバチの生活は植物に依存している。植物といっても私たちが葉や果実・種子、あるいは根を食べるのとは違って、ハナバチという類別があるように、ミツバチの生活はいわゆる蜜源植物、花粉源植物などの花に頼っているのである。

そこで「ミツバチ科学」としても、創刊号では余裕がなかったものの、第2号から、蜜源植物シリーズを始めたのであった。記事の都合で、時々飛んでいるが、13年間にわたって45種類が掲載されたことになる。ミツバチの生産物のもとであるこれらの植物は、養蜂家にとっても生活の拠りどころである。早くから、蜜源植物に関する書籍も出されてきたが、その後、頼るべき資料が書籍の形で上梓されていないのは残念である。

私たちとしても、今一度蜜源植物を見直してみようと考えて、手始めに、先に掲載した45種をまとめた特集とした。こうしてみると、ずいぶん大勢の方々をお願いしたことがみえてくるが、ミツバチ科学の創始者である私たちの恩

師、岡田一次博士に一つの記事もお願いしなかったのは悔やまれるところである。岡田先生はもちろん、蜜源植物を大変に気に掛けておられ、いくつかについてはミツバチ科学などにも記事を書かれ、また、ご自分の「ミツバチ記」にも、関連記事を載せられている。このシリーズには、自分は控えられて、出来るだけ多くの方々にお願いをすることを優先された岡田先生の考え方が偲ばれる。

また気が付くのは、ハナダイコンに始まり、クズに終わっているシリーズで取り上げられている植物たちが、必ずしも、いわゆる蜜源としての、あるいは花粉源としての重要さを中心としていないことである。岡田先生は、常々幅の広い見方を指導され、私たちも、養蜂という見方よりもミツバチ科学という考え方で進んできた。その方針が如実に反映されているともいえるだろう。

それにしても、せっかくの蜜源植物シリーズなのであるから、重要なものは網羅しておくべきであったともいえる。日本養蜂はちみつ協会では、平成14年度から(社)畜産技術協会の委託を受けて、「みつ源確保技術確立委託事業」が実施されている。主な事業内容には、蜜源分布調査、新蜜源利用可能性調査、ハチミツの成分分析がある。そのうち、蜜源分布調査に関しては、全国の会員を対象に、重要な蜜源植物(採蜜量が多いか蜜質がよいもので、増殖したい植物)のアンケートをとっている。その報告は改めて公表されるものと思うが、参考のためにアンケート結果を資料として見せていただいた。

それらの中には、ミツバチ科学のシリーズに扱われていないもののがかなり上げられており、それらをあげておくのは、今回の特集を元に今一度、蜜源植物に取り組もうとする私たちの宿

題の一つとなるだろう。

アベリア、ウルシ、エゴノキ、エンジュ、カラスザンショウ、クロガネモチ、コシアブラ、シコロ、セイダカアワダチソウ、ソヨゴ、トウネズミモチ、ハギ、フジ、ヘアリーベッチ、ミズキ、リョウブ、リンゴ（アイウエオ順）がそれらである。

最近は何度目かのハチミツ・ブームといわれ、有り難いことである。最近の傾向は、生活の余裕がもたらしたのか、珍しいハチミツへの指向が高まっている。生物の多様性を重く見る私たちの立場からも歓迎すべきことといえよう。この中では、国際性も浮き出してくるが、シリーズを振り返って見ると、外国の蜜源植物がほとんど扱われていないことにも気がつく。原産ということを別にすると、ラベンダーが唯一の外国のものである。

ラベンダーと言えば、フランスの山奥の養蜂場を訪ねたときに、一番のハチミツはラベンダーだと言われた。日本でも一面の畑があるけれども蜜は聞いたことがないが、というと、花を楽しむラベンダーと蜜を出すものは別物だ、と言われてそんなものかと思ったことを思い出す。

また、オーストラリアでは、ユーカリの蜜が多いが、なんで日本人はユーカリ蜜を買ってくれないのか、と言われたこともある。好みの問題だからと答えるほかはないが、最近の考え方によれば、大分事情が違うかも知れない。

本来蜜源植物を扱うには、植物そのものだけでなく、花蜜、花粉などについても触れるべきであろう。ただし今回は、上記の事情で復刻を基本とした。季刊誌であるから、その折々の季節や、話題に触れながらの読み物になっており、少し古く感じられるものもあるが、事情をご理解いただきたい。

ミツバチ科学誌では、折りに触れて幅広い扱い方を心がけてきたので、それらのミツバチ科学に掲載された関連文献等については、巻末に資料・索引の形でつけてある。入りきらずに省略せざるを得ない記事群をながめてみると、「ミツバチ科学」という雑誌がなかなか役に立つ雑

誌であると思う我田引水をおゆるしいただけるのではないかと考える次第である。

蜜源植物については、欧米でも多くの書籍が出ており、養蜂の中に正しく位置づけられているものも少なくない（例えば、Crane, 1990 Graham, 1992, など）。特にGrahamが編集した、“The Hive and the Honey Bee”は、アメリカ Dadant 社の渾身の作品であり、私たちも、養蜂とそれを取り巻く周辺分野を知るのに、常々参照させてもらっている。この中には、アメリカの蜜源植物一覧表があり、拠り所として価値が高い。これらの先達に続いて、日本におけるミツバチ科学関連情報発信基地を自負している私たちも、一層の前進を心がけたい。

工業化が進み、人口が増えた日本では、蜜源植物の確保はますます重要性を増しており、日本養蜂はちみつ協会でも、蜜源保護を活動の大きな目的の一つにしているのは当然である。

日本の人口は、数年のうちに減少に向かうと予想されているとはいえ、十分に過密で、都市化が進んだので、養蜂業も成り立ちにくい。ハチミツの国内生産量は3,000 tを下回り、需要の90%以上を輸入に頼っている。この傾向が止まるとは思いにくい、その中にあるても、蜜源植物保護の旗をおろすことは出来ない。国土緑化のために、また都市の中のみどりとして、そして私たちの生活基盤が、「自然」にあり、植物に依存しているという意識は、ますます重要な視点になってくるものと思われる。

参考となる書籍等

- Crane, E. 1990. Bees and beekeeping science, practice and world resources. Heinemann Newnes, Oxford. 614 pp.
- Graham, J. M. (ed.) 1992. The hive and the honey bee. Dadant & Sons, Hamilton. 1324 pp.
- 幾瀬マサ. 2001. 日本植物の花粉（第2版）. 廣川書店, 東京. 252 pp. + 369 pl.
- 井上丹治. 1971. 新蜜源植物綜説. アヅミ書房, 東京. 253 pp
- 岡田一次. 1986. 「ミツバチ記」. 私家版. 68 pp.
- 関口喜一. 1949. 日本の養蜂植物. 柏葉書院, 東京. 259 pp.
- 渡辺寛・渡辺孝. 1975. 近代養蜂. 日本養蜂振興会, 岐阜. 726 pp.